

妖怪をめぐる誤解・誤解が生み出す妖怪

香川雅信^{†1}

サブカルチャーとしての「妖怪文化」は 18 世紀後半の都市で生み出されたが、それはある大きな「誤解」に基づくものであった。その「誤解」は、現在においても繰り返されている。

Misinterpretation upon “Yokai”

MASANOBU KAGAWA^{†1}

“Yokai culture” as a subculture is produced in cities in the latter half of 18th century, which is based on a great misinterpretation. This misinterpretation is repeated even now.

1. はじめに

現在、子どもたちのあいだでブームを巻き起こしている「妖怪ウォッチ」をはじめとして、妖怪はマンガ、アニメ、ゲームなどの日本のサブカルチャーにおいて大きな位置を占めている。こうした状況は、直接的には昭和 43 年 (1968) に水木しげるのマンガ『ゲゲゲの鬼太郎』がテレビアニメ化されたことに始まる「妖怪ブーム」によってもたらされたものであるが、すでに江戸時代中期には、妖怪は当時のサブカルチャーである草双紙や浮世絵、歌舞伎などのなかに頻繁に登場しており、日本の「妖怪文化」は 250 年もの伝統を有したものだといえる。

もっとも、サブカルチャーとしての「妖怪文化」以前に、妖怪は「民俗文化」として日本社会に存在していた。いや、そのような表現は本末転倒だろう。「民俗文化」としての妖怪こそが本来のものなのだから。妖怪は、人間の理解を超えた災いや不可思議な現象を、理解可能なものとするために生み出された概念であり、人間の力ではどうすることもできない「自然」[a]の象徴であった。それゆえに妖怪は、日本人にとって長らく畏怖の対象であった。

そうした妖怪に対する考え方が変わってきたのが江戸時代中期であり、それによってサブカルチャーとしての「妖怪文化」が成立することになるのだが、実はそこには妖怪に対する大きな「誤解」とも言える事態が起こっている。だが、その「誤解」こそが「妖怪文化」を生み出したのだと言えるだろう。

妖怪研究を専門としている筆者からすれば、現代の日本人が妖怪に対して抱いているイメージの九割方は「誤解」である。河童は緑色ではないし、ザシキワラシは「いい奴」

ではないし、砂かけ婆は婆ではないし、子泣き爺は爺ではない。ぬりかべは「現象」であって「存在」ではない。おそらく妖怪ほど「誤解」されたものはないと思われるのだが、それは妖怪が実在しないものであることに加えて、そもそも日本の「妖怪文化」が「誤解」によって成り立っていることに原因があると見る事ができる。

本発表では、この「誤解」がいかなるものかを明らかにし、それがいかに現代の日本人の妖怪観を決定づけているのかについて論じてみたい。

2. 「伝承」から「情報」へ

サブカルチャーとしての「妖怪文化」が成立したのは、江戸時代中期、具体的には 18 世紀後半のことであると考えられる。というのは、この時代の「黄表紙」と呼ばれる草双紙のなかに、主な登場人物がすべて化物（妖怪）である「化物づくし」と呼ぶべきジャンルが成立するからである [1]。言い換えれば、「フィクションとしての妖怪」「キャラクターとしての妖怪」が成立したのが、この時代であった。

そして、「化物づくし」の黄表紙と並んで重要な意味を持つ作品が「妖怪図鑑」である。安永 5 年 (1776) に刊行された鳥山石燕の『画図百鬼夜行』は、半丁 (1 頁) ごとに 1 種類ずつの妖怪の名前と姿形を紹介した、まさに「江戸の妖怪図鑑」というべき書物であった。

こうした「妖怪図鑑」が現れた背景には、当時の都市の住民の「博物学的思考」もしくは「博物学的嗜好」があった。18 世紀には、西洋の博物学 (natural history) に相当する「本草学」と呼ばれる学問が、「享保の改革」以降の殖産興業政策のなかで重視されるようになっていたが、18 世紀後半になると、学問としての博物学ばかりではなく、多くのものを収集し、分類し、陳列するという博物学の知のスタイルが、都市の住民の考え方や物事の楽しみ方として浸透していく [2]。

例えば、さまざまな主題のもとに、あらゆるものを列挙

^{†1} 兵庫県立歴史博物館
Hyogo Prefectural Museum of History

a) ここで言う「自然」は、「文化」の対立項として「自然」をとらえる文化人類学の考え方に基いている。人の手が加えられたものとしての「文化」に対し、人の手が加わらない「生」のままのもの、人の手でコントロールできないものが「自然」である。

しランキング化した「見立番付」や「名物評判記」などがおびただしく作られたのはこの時代のことであった。また、この時代を代表する本草学者＝博物学者である平賀源内によって始められたとされる「薬品会（やくひんえ）」は、本草書に紹介されたさまざまな自然物をはじめとして、普段目にするののできないような珍しい物を一堂に会して陳列する一種の博覧会のような催しであったが、寛政（1789～1801）のころには、それを常設化したような「珍物茶屋」や「孔雀茶屋」「花鳥茶屋」などと呼ばれる娯楽施設が現れる。これらは、茶を飲ませる「茶屋」であると同時に、珍しい物や動植物を見せる、現在の博物館や動物園・植物園に相当するものであった。そして、動植物などを細密に描いた博物図譜は、本草学の資料として制作されたもので、庶民が目にする機会はほとんどなかったが、当時ブームであった俳諧・狂歌に詠まれたさまざまな動植物を挿絵で紹介した「絵入り俳書」や「狂歌絵本」は、一種の世俗化した博物図譜と見なすことができる。

こうした「博物学的思考／嗜好」の広がりには、実際にこの時期、都市に圧倒的な量のモノと情報が集積されていたことに対する人々の情報処理のあり方を反映したものであったと考えられる。そして、この「博物学的思考／嗜好」が妖怪の世界に向けられた結果、生み出されたのが「妖怪図鑑」であった。

だが、「妖怪図鑑」は、それまでの妖怪のあり方を決定的に変えてしまうことで、はじめて成立するものであった。「妖怪図鑑」では、さまざまな妖怪たちが名前と姿形で弁別されるものへと還元され、民間伝承や説話文学、古典芸能、あるいは完全な創作物といった出自の違いを超えて、等価なものとして列挙されている。この場合、妖怪は時間と空間を超えて流通可能な「情報」へと変換されているととらえることができるだろう。

だが、本来、妖怪とはそれが語り伝えられた土地や共同体と切り離しては存在し得ないものであった。かつての「民俗社会」において、妖怪はそれがどのような場所に現れ、どのような現象をもたらすのか、具体的な場所や人名とともに語られ伝えられるものであった。妖怪が実在するものでない以上、それが存在し得るのは共同体の人々の「語り」を通じて構築される間主観的なイメージの世界のなかだけであった。この「語り」を通じて間主観的に構築され共有される知識が「伝承」である。

つまり、本来、土地や共同体と切り離すことのできない「伝承」を、どこにでも流通可能な「情報」へと変換する時点で、すでに大きな「誤解」が生じているわけである。それに加えて、「妖怪図鑑」は妖怪を名前と姿形によって弁別されるものとして扱うが、これも本来の「民俗文化」における妖怪のあり方からすれば、決定的な変容であった。「民俗文化」における妖怪にとって、その姿形などはあくまで二次的な要素にすぎなかった。いや、はっきり言えば、

姿形などどうでもよかった。妖怪がどのような場所に現れるのか、どのような事態を引き起こすのか、どうすればそれを避けることができるのか、といったことの方が、人々のリアリティのなかに妖怪が生きている「民俗社会」においては重要だったのである。そもそも妖怪は、人間には理解不能な出来事を理解可能、納得可能なものとするために持ち出される「概念」としてとらえられるべきで、姿形が備わった「モノ」としてとらえるのは、やはり「誤解」なのである。

しかし「妖怪図鑑」は、「民俗社会」において重要だった土着の生活知識的な部分をすべて捨象し、むしろ二次的であった姿形という要素に重点を置いた。これは博物学という知の営みに特有のあり方だった。フランスの哲学者ミシェル・フーコーは、博物学における観察とは「見るだけで満足すること、体系的にわずかな物しか見ないこと、表象のやや混乱した豊かさのうちで、分析されうるもの、万人に認められうるもの、だれにでも理解できる名をもちうるものだけを見ること」[3]であると述べている。民間伝承や神話なども包含していたそれまでの自然記述のあり方に対し、博物学は五感によってとらえられるもの以外のすべての要素を捨象し、「万人に認められうるもの、だれにでも理解できる名をもちうるもの」のみを記述する。これはまさに、物事を流通可能な「情報」へと変換する過程であると思なすことができる。この博物学的なまなざしにおいて、視覚はとりわけ重要な要素であった。妖怪は、姿形という要素を前面に出すことで、「博物学的思考／嗜好」の対象となり、空間と時間を超えた多くの人々に共有されうる「情報」となったのである。

これこそが、サブカルチャーとしての「妖怪文化」を生み出した、決定的な変容であった。妖怪と聞くと、当然のように何らかの姿形を備えたものだと思込んでしまう日本人の妖怪観は、ここに始まるのである。そして、名前と姿形によって弁別される存在となった妖怪は、そのまま現代言うところの「キャラクター」となっていった。「妖怪図鑑」の同時代、「キャラクターとしての妖怪」が大活躍する「化物づくしの黄表紙」がもてはやされたのは、おそらく偶然ではない。それらはいずれも、「伝承」から「情報」へと大きく変容していった、妖怪の存在論に根ざした出来事だったのである。

3. 「誤解」が生み出した妖怪たち

※本発表では、「誤解」によって生み出されたと考えられる日本人の妖怪イメージについて、具体的な事例を紹介しながら検証する。

参考文献

- 1) アダム・カバット：江戸化物草紙，小学館（1999）.
- 2) 香川雅信：江戸の妖怪革命，河出書房新社（2005）
- 3) ミシェル・フーコー：言葉と物——人文科学の考古学，新潮社（1974）.